短夜の夢

くろうんも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
短夜の夢

【Ｎコード】
Ｎ２４００Ｕ

【作者名】
くろうんも

【あらすじ】
大学生の藤一は夏休みの避暑のために山奥の叔父の家へと十年ぶりにやってきた。そこで、外見だけ大人に成長した従姉、美咲と再会。更には素性不明な少女、帆乃香も混じって賑やかに避暑を楽しんでいたが、ある日をきっかけにして村人の暗い素性を垣間見ていくことになってしまう。

一日目（1）

藤一は父親のお古のバイクを巧みに操りながら、曲りくねった山道を爆走していた。

山道は舗装されているが、乗用車がギリギリ離合出来る程度の幅しか無い。更に、右手は険しい山、左手は一歩踏み外そうものならばもれなく命を落っことしてしまうことは確実な切り立った崖になっていた。

しかし、景色だけは抜群に良い。隣の山、その隣の山。十重二十重に山が連なる光景は、壮大と言って差し支えないものだ。

ところが。藤一にはそんな風景を楽しむ余裕など無かった。藤一は緊急事態に陥っているのだ。崖から落ちるリスクを負うことも気にせず、少し出し過ぎなほどのスピードで走っている。

着ているシャツの下は、冷や汗でビッショリだった。気分は、小学校、中学校、高校と、幾度と無く感じた、あの遅刻間際のギリギリさである。一秒一秒が命取りとなる。

藤一は、尻の穴を塞ぐようにバイクのシートに強く座りなおした。幾らかだけ、楽になるがまた直ぐに肛門が大爆発寸前にまで圧力が高まる。

率直に言うと、藤一は腹を壊していた。

性悪の根源は、おそらくは一時間前に道の駅で食べた”柚子ソフトクリーム”だ。夏だからと言ってちょっと冷たいものを食べ過ぎた。

腹が水っぽい音を立てて脈動する。

「ふっ……ううぅぅ……！」

ビクンッ、と藤一は体を一瞬こわばらせ、危うく操作ミスで崖から落ちそうになった。

もちろん、ここは山の中。この母なる大自然に囲まれて行為に至り、食物連鎖の一番下の部分への肥しにするという選択肢もあるに

はある。
しかし、藤一は生粋の都会っ子だった。
ならば当然、屋外で自分の大切な部分、しかも前ではなく後ろを晒すという行為が生み出す羞恥は、例えここが車のあまり通らない山道であっても計り知れない。
それでも。勇気を出して、踏ん切りをつける一歩手前まで行った。
しかし、よくよく思い出してみるとポケットティッシュ等、拭くものを背中に背負っているリュックに入れた記憶が無い。これでは、行為の後始末は不可能なものとなる。
もちろん、ここは山の中だ。葉っぱという最終手段も存在する。
しかし、藤一は生粋の都会っ子である。葉っぱで大事な部分を拭うという行為への抵抗感は、並大抵のものではない。
つまるところ、籐一にはトイレを探して行為に至るしかないのだ。
と。ようやく何かしらの看板が見えた。しかし、その表示は籐一の期待むなしく、次の道の駅が直進十二キロの場所にあるという絶望的なものであった。
「うほおああああああーーーーーーーーーっ！」

一日目（2）

「はー、すっきりした」

語尾にハートマークすら付きそうなほど嬉しそうな口調でそう呟きながら、トイレから出てくる藤一。藤一は勝ったのだ。便意との戦いに。便意という、人類が決して逃れることのできない天敵中の天敵との戦いに。

その顔は男の顔だった。手に汗握る戦いを終え、全てをやり遂げた勇者の顔。

柚子ソフトクリームという憎むべき敵への憎悪も、もう無い。

あまりに利用者が少なかったのだろう。その道の駅は放棄されていた。

今は、外に一つだけ置かれた古い自販機が発する音だけが、空しく響いている。

賞味期限は大丈夫なのだろうかと思いながらも、藤一は百円という都会では考えられない値段のペットボトルのスポーツドリンクを買った。

どうやら、自販機とトイレの管理だけは行われているらしかった。ジュースは製造されてからそれほど時間は経っていないし、トイレにはちゃんと紙があった。

先ほどトイレに駆け込んで行為に至った直後の、そういえば閉鎖されているけどまさか紙がないのでは、という絶望感。ここまでの苦労が全て水の泡になってしまう恐怖。そして、ふと見たホルダーに新品同然の紙が設置されていた時の幸福感は何事にも代えがたかった。別にキリシタンというわけではないが、この時だけは神に感謝したというものだ。

今にも崩れそうな雨ざらしのベンチに座って、スポーツドリンクを飲み、藤一は地図を広げた。

籐一の目的地は、この山道を抜けた先にある小さな村だ。

昔は鉱山で生計を立てていた人々の子孫が農業で細々と暮らす、本当に小さな村。
誇るものも何も無く、過疎もドンドン進んで、近いうちに滅びてしまうことは明白であった。
その村に住む叔父の家へ、避暑に行こうとしているところだった。
「うおし。行くかね」
ベンチから立ち上がり、両手を思い切り上に伸ばす。
バイクに跨り。エンジンを掛けて。心のオアシスとなった道の駅を後にした。

一日目（3）

山の隙間にひしめき合うように、その村はあった。何でこんな所にすんでいるのかと小一時間問い詰めたい衝動に駆られるほど、不便で窮屈な村。山の斜面に棚田や果樹園が見える。

都市部から入ってきた食料を販売している、小さな小売店も伺い見ることが出来た。

そして、その建物の大半が藁葺き屋根だった。幼い頃は毎年のように避暑にやって来ていたが、大人（自称）になって久々に見ると、新鮮なものである。

「やれやれ。お婆ちゃんのためとはいえ、叔父さんも大変だよな」

舗装もされていない、左右に田んぼが広がっている畦道を、滑らないように慎重にバイクを走らせていく。農作業をしている、ＴＨＥ頑固と表現するのが酷くシックリくるおじいさんと目が合った。直ぐに目をそらしたが、いつまでも背中に視線が突き刺さるのが痛い。

叔父の家は、村の一番奥にあった。藁葺き屋根ではなかったが、年季の入った木造二階建ての家だ。

小学校五年生の頃、祖父の葬式で訪れて以来だった。

懐かしい場所に少しだけ気を良くしながら、石の門柱の間を通過し、駐車してある旧式の汚れた白いバンの隣にバイクを止めた。都会人からすればうらやましいほど広い庭だが、裏にある果樹園から採ってきた蜜柑が入ったコンテナや農具なんかが所狭しと並んでいて狭く感じた。

そして、家の縁側付近に、物干し台があった。その物干し台には、洗濯しても落ちないのであろう汚れだらけの作業服やタオルやらシャツやら、主に叔父のものらしき洗濯物が干されている。

そして、端の方に、フリルのついた女性用下着が上下並んで干されているのが見えた。祖母があれを身につけているとは考えにくい。

「……」
「わっ！　何で干してあるんだ！　おい籐一見るなっ！」
バイクのエンジンを聞きつけたのであろう。扉から顔を出した二十歳くらいの女性が、藤一の視線を追った先にあった下着を見、顔を真っ赤にしながら慌てて飛び出し、籐一には見向きもせずに下着を回収して縁側から部屋の中へ放り込んだ。
そして、頬を少し朱に染めつつも、あたかも何も無かったかのように装いながら、ポニーテイルに纏めた腰まである茶髪を揺らして、籐一のところに駆け寄ってくる。
服装は、ジーンズに白いTシャツという飾り気も色気もクソもないものであるが、そのTシャツを大きく突き上げている豊満な胸は、それだけで立派な色気である。
「あはは。籐一、久しぶり。大きくなったな」
「久しぶり、ねーさん。ねーさんも大きくなったな、胸が」
「ふっふっふ。高校二年の時に成長期が訪れてな。牛乳を毎朝飲んだ甲斐がって久しぶりに出会った瞬間にセクハラかよこの野郎！　どうした籐一。どこか熱があるんじゃないのか？　お前はもっと、純粋な、こう、性的な知識なんてまるで持ってないピュアボーイじゃなかったのかっ！」
「残念ながら、高校と大学で毒された」
「ああっ！　なんということっ！　あの短パンから伸びるすべすべした足で、おねーちゃーんとか言いながら目をキラキラさせて僕を追いかけてくるかわいらしい藤一はどこにっ！　時の流れというものはかくも残酷なものなのかっ！」
オーバーリアクション甚だしい挙動で崩れ落ちる女性。しかし、少し引いた場所で藤一が見ていると、少し恥ずかしそうに笑いながら立ち直り、藤一の背中をバンバン叩きながら家の方へと誘導し始めた。
「よーしっ、飲むぞーっ！」
「昼間から酒を飲ませるつもりかよ」

「こんな娯楽も何も無い村、酒くらいしか楽しみがないんだよっ。
年寄り共だって昼間っから宴会やってらー」
改めて考えると恐ろしい村である。

一日目（4）

女性は、星野美咲。籐一の叔父の娘、つまり籐一の従姉である。年齢は藤一の二歳年上。大学には行かずに高卒で社会人になったと聞いたことがある。

昔から藤一が避暑に訪れるたびに、一緒にこの狭い村で縦横に遊びまわったものだ。ざっくばらんで男らしい言動に、気の弱かった藤一は憧れに近い感情を抱いたものだった。

しかし。こうはなりたくないよなあ、と、早速籐一は思った。

本当にビールを取り出してきた美咲と一緒に縁側で宴会を始めたはいいものの、どうやら美咲は致命的に酒が弱いらしい。ビールを二杯飲んだだけで真っ赤になってぶっ倒れた。そしてそのまま、両手両足を丸めて小さくなって、クークーと案外可愛らしい寝息を立てながら眠り始めた。

しかしまだ瓶の中にはビールが残っている。藤一は、一人で自分のグラスにビールを注いで飲み干し、ツマミとして出してきたイカの燻製を口に放り込んだ。実は、籐一は酒に非常に強かった。少々飲んだくらいではバイクの運転に全く支障が出ないほどだ。もちろん違法であるからしてやらないが。

本当に美咲と同じ血が混じった人間であろうかと疑わしくなるほどである。

「おっ。藤一君じゃないですか」

何をしようか、と悩んでいると、庭に蜜柑のコンテナを担いだ中年男性が出現した。その作業着姿の男性は、籐一と目が合うなり、優しい笑みを浮かべてコンテナをその場に下ろした。

籐一の叔父、星野誠吾だった。

「お久しぶりです、叔父さん。お世話になります」

籐一は、その場に立ち上がってお辞儀をすると、誠吾は照れくさそうに手を振った。

「久しぶりですねえ。何年ぶりな事やら。まあ、もう大きくなった藤一君にとってはつまらんところですが、いくらでも泊まっていってください」
「はい、ありがとうございますっ」
「うーん。じゃあ、僕はちょっと会合に出てきますので、そこで寝てる馬鹿娘を頼みます。ああ、冷蔵庫にお酒入ってるんでいくらでもどうぞ」
そう言い残して、誠吾はコンテナを庭にあるコンテナの山に積み、そのまま出て行ってしまった。
本当に酒しか娯楽がないんだな、としみじみ思う籐一である。
ふっ、と。籐一の斜め後ろの畳の上で眠っている美咲に目をやった。改めて、マジマジと見入ってしまう。
半そでのTシャツの袖から伸びる、折り畳まれたスラッと長い手は、意外なほど白くてか細い。そういえば、籐一は彼女の肌が小麦色に日焼けした姿しか見たことが無かった。
日焼けをしなかったら、こんなに白くなってしまうのか、とカルチャーショックのようなものを感じた。
視線を動かす。折り畳まれた手の奥にある、豊満な胸へ。
籐一は思わず生唾を飲んだ。
（ブラつけてねーじゃねーかこの野郎……）
なんというか。Tシャツを押し上げ、今は腕に押しつぶされて歪な形をしている胸のシルエット。更にそのシルエットの極めて狭い部分が尖っていたりした。
更に視線を動かす。
酒が入って朱に染まった頬。額に浮かんだ汗。それが、何やら性的なものを連想させてしまうのは、籐一が童貞だからだろうか。
ポッテリとした赤い唇を時折動かす姿が艶かしい。
（……やべ）
最近欲求不満なんだろうか。従姉に欲情するなどと。
居心地悪げにゴソゴソと座り姿勢を変えていると、

「ああっ！　美咲ちゃんが籐一の毒牙にいいいいいっ！」
という妙に甲高い少女の声と共に、背中に衝撃が走り、別段重くないものが背中にのしかかってきた。
「だめぇーっ！　美咲ちゃんは籐一の従姉なんでしょっ！　それはきんしんそーかんとかいうやつなんだよっ！」
と。籐一の背中にのしかかってきた少女は、籐一の肩をつかんで揺さぶる。
「……どなた様で？」
籐一はこんな声の持ち主を知らない。
揺さぶられながらも、妙に落ち着いた口調でそう言うと、少女は、はっ！としたように籐一の背中から下りた。
そして、改めて籐一は少女の方を見た。
小麦色に焼けた肌と、対照的に眩しいまでに白いワンピース。そして麦藁帽子と、そこからはみ出たパッツンに切り揃えられた前髪と、背中に長く伸びる黒髪。田舎の子供、というよりも、何だか古きよき時代を体現したかのような少女だった。
顔つきはまだ幼く、二桁行っているかどうかも怪しい。
少女は、藤一に見つめられ、少しだけ頬を染めてモジモジしている。しかし。
「……本当に誰だ！？」
声はさておき顔を見れば思い出せる程度の間柄の少女が出現するかと思ったら、本当に見覚えの無い少女がいて、籐一は思わずちょっと大声を出してツッコミを入れる。
すると少女はショックを受けたような表情をした。その円らな瞳の端にみるみる真珠のような涙の粒が溜まり。
「……と、籐一のバカーッ！」
そのまま少女は捨て台詞を残して、駆け出した。
その小さな背中を籐一は唖然とした表情で見送り、しばし思案した後、深く考えないことにした。田舎のネットワークは恐ろしいと聞いたことがある。その辺の子供が自分のことを知っていてもおか

しくはない。
藤一は、気を取り直して誠吾のお言葉に甘えてビールをもう一本開けたのであった。

二日目（1）

藤一は、耳を劈くようなせみの鳴き声で目を覚ました。

やけに近く聞こえると思ったら、アブラゼミが網戸に止まっているのが見えた。一週間という短い時間しか残されていない命がけの求愛行動の真っ最中である。

しかし籐一にとっては迷惑極まりない。立ち上がって、アブラゼミの後ろからデコピンを食らわせて追い払った。

ここは、星野家の二階にある空き部屋だった。半分物置として使われていたが、以前は誰かの部屋だったのか旧式のクーラーも設置されていて、快適な睡眠を約束している。

というよりも、流石は山奥と言うべきか。クーラーが無くても窓を開けていればかなり涼しく快適であった。

枕元に置いた腕時計を見ると、もう昼前であった。家の主である誠吾に、いくらでもくつろいでいいと言われていたが、あまりにもくつろぎ過ぎだろうと思った。

この家にもリズムと言うものがあるはずだ。郷に入れば郷に従え。そのリズムを乱すのはあまり好ましいことではないはずだ。明日からは少し気をつけてみることにする。

集中しなければ気づかないくらいの鈍痛を頭の内部に感じた。無視してもいいくらいだったが、気になり始めたら無性に気になり始める。

昨晩。夕食の後、誠吾と一緒に昨日二度目の酒盛りを始めた。一度目は美咲が早々にリタイアしたせいでそれほど大量には飲んでいないが、二度目は相手が相手であった。まさしく酒豪。二人で合計五本も開けてしまった。それについていく自分も大概だ、と思いながら、布団を片付け始めた。

ちなみに美咲も参加したが、やはり最初の数杯でダウンという体たらくで、早々にこの部屋の隣にある自室に引き上げていってしま

った。誠吾曰く、弱いのに酒好きで無茶ばかりする子だ、とのことである。
布団を押入れに押し込み、部屋を出る。人気が無い。蝉の音だけが妙に喧しい。
今にも崩れ落ちそうな軋み音がする階段を下りて居間に入ると、テーブルの上に和食中心の朝食だけが用意してあった。二人分。あの四角錐の網で虫がたからないようにしているのがいかにも田舎っぽく感じる。
そして、その傍に、置手紙が置いてあった。
『籐一ちゃん、美咲ちゃんへ。ご飯は自分でよそってください。鍋にお味噌汁があります。田口さんの家に行ってきます。おばあちゃんより』
それは、籐一と美咲の祖母たる、星野時子からであった。昨日の夕食も時子お手製であったことを思い出す。
本来ならば家事を担当するべき美咲の母親は長期的な入院中と聞いている。
美咲はまだ寝ているらしい。網の蓋の中にある二人分の朝食に手をつけた様子は全く無い。
起こさなくてもいいだろう。過去の経験から言って、無理やり起こそうとすると怒髪天を衝くはずである。
再加熱した味噌汁と炊飯器で保温されていたご飯。電子レンジで温めたおかずで朝食を簡単に済ませた。
茶碗と皿を流し台につけて、一旦部屋に戻る。荷物が入ったリュックサックから、スケッチブックと色鉛筆を取り出した。スケッチブックはまだ新品に近いが、色鉛筆のケースの方は相当年季が入っているのが分かった。蓋の蝶番が壊れかけていている。
籐一の数少ない趣味のひとつが、写生であった。その腕前も相当なもので、かつては学校の写生大会でも入選を繰り返しているほどだった。
今回の避暑旅行も、実はこの田舎の風景を描きたくなったから思

い立ったようなものだ。
スケッチブックと色鉛筆を小脇に抱えて階段を下りて、家を出る。鍵はどこだろうと思ったが、そもそも戸に鍵が見当たらないと言う素晴らしさ。大体にして、開放感１００パーセントな雨戸全開の状態なのだから鍵を掛ける必要性すら見当たらない。
こんな田舎の村で泥棒などはたらこうものなら、あっという間にアシが付いてしまうのは目に見えているであろう。
家の敷地から出た籐一は、裏にある果樹園、更にその奥の山の方へと向かった。なだらかな丘に作られた果樹園を通り抜けんと脚を進めていると、農作業をしている誠吾が目に入ってきた。
「おはようございます、叔父さん！」
「はいどうもー。どこ行くんです？」
「山、登りたいんですけど。確か道ありましたよね？」
籐一の記憶の中に、果樹園の隅に山道が存在していた。幼い頃に美咲に引っ張りまわされた場所だったと記憶している。
「ありますけど、整備してないですから入り口が木で埋まってるかもしれません。何とか通り抜けてくださいね」
「了解ですー」
言い残して、籐一は更に脚を進めた。
なるほど。確かに記憶の中に山道があったはずの場所は、立ち木の枝や、地面から生える背の高い雑草なんかで覆われてしまっている。だがしかし、その密度はやはり低い。
手で枝を払いのけ、雑草を掻き分けて進んでみると、少し開けた獣道のような山道が現れる。どうやら鬱蒼としているのは入り口だけで、太陽光線が入らない山道には枝が張り出していることも無いようだ。
籐一は、腐葉土を踏みしめて山を登り始めた。
上空に大きく張り出した青々とした葉を目一杯つけた木の枝が、さながら『緑のトンネル』と形容できそうなほど、天を多い尽くさんばかりに張り出している。

けたたましい鳴き声に全ての聴覚を持っていかれそうなほどのアブラゼミの合唱。そこら中に潜む小動物や虫の気配。　全て、昔と同じだった。相変わらず、この山は自然に満ち溢れている。

いくら涼しい山奥と言っても夏。汗で服を濡らしながら、ただひたすら進む。昔は平気で駆け上がっていたような気がしないでもない。子供の力というのは時に恐ろしいものがある、と思った。

そして途中で脇道が出現する。この脇道を進むと、うち捨てられた倉庫があった記憶がある。美咲と入ったことがあるが、ただひたすら不気味だった記憶がある。今思い出しても背筋が少し寒くなる。

頭をブンブンと振って、本道を進んだ。

結局十分ほど上がったところで、道は途切れた。頂上、というにはまだ足りないが、そこは展望台だった。トンネルは既に抜け出ており、まばゆいばかりの青い空が頭上にある。そこはちょっとした広場になっていて、簡易的な柵で囲われている。崖、というほどではないが、柵の向こうは急斜面になっている。

何もかも記憶通り。ここから見ると、村を全て見渡すことが出来た。それは所謂絶景だ。

藤一は、柵の傍でズボンが汚れるのを気にもせずに座り込むと、スケッチブックを開いた。

そして、穏やかな村の風景を切り取って、スケッチブックに張り付ける作業を、しばらく続けていく。

二日目（2）

そしてそれは唐突に起こった。いや、それは唐突と言うよりも、写生に夢中になっていた籐一が気づかなかっただけと言ったほうがいいだろう。

中身だけ入れ替えながら使ってきた、年季の入ったボロボロな色鉛筆セットに、小さくなった緑色の鉛筆を入れて一休みするつもりで後ろに倒れこんだ。

そして、視界一杯に、二本の肌色の棒が飛び込んでくる。その二本の棒の付け根はクマのような動物が描かれた白い布地で覆われているのが見えた。それが人間の足であり、その白い布地はいわゆる女児用のパンツであるということに気づくのに数秒を要した。

「うおっ！？」

慌てて起き上がると、籐一の真後ろに少女が立っていた。昨日突然藤一を襲撃してきた、白いワンピースに麦藁帽子姿の少女。

籐一と少女は、しばらく見つめあった。籐一の先ほどの行動にキョトンとしているようだったが、それでも少女の方が先に動いた。籐一の横にやってくると、いたずらっぽい笑みを浮かべてスケッチブックを覗き込む。

「籐一絵上手いね」

「え、あ、いや、そんなことは……」

子供相手とはいえ、まさか自分の絵が褒められるとは思っていなかった籐一は、一瞬にして頭に血が上るのを感じた。誰かに見せるつもりで描いていた訳ではないからして籐一の趣味丸出しだというのに。

「見てっていいよね？」

少女はそう言うと、その場に座り込んで籐一に、期待に満ちたキラキラした瞳を向けている。断られるとは微塵にも思っていないようだ。口調からもそれは分かる。

しかし、籐一は逡巡した。自分の拙い作品製作過程を人に見られることほど恥ずかしいものは無いと思っているからだ。
断るに断れない。
「別に、いいけど」
しぶしぶ、といった感じで、籐一はそう言い、再び鉛筆を握り締めた。休憩するつもりが休憩しそこねたが、そんなこと藤一の頭の中には無かった。ただひたすら、恥ずかしかった。

結局五時間ほど写生をしていたのだが、その少女はその飽きもせずにずっと籐一の傍にいた。その根性に籐一は脱帽し、スケッチブックを閉じて色鉛筆を片付けながらふと見ると。
「くー……」
前言撤回。涎を垂らしながらこれでもかと言わんばかりに寝ている。今まで五時間も一人で勝手に辱められていたと思うと、逆に空しくなってくる。
「おい。おいっ！　起きろ！」
肩を持ってユサユサ揺すると、少女は直ぐに目を覚まし、籐一の顔を見、頬を朱に染めつつ、肩を抱いて籐一から少し距離をとる。
「はっ……！　籐一まさか無防備に寝ているアタシにあんなことやこんなことを……！」
「するかよ」
とんでもないことをのたまう少女に、一体どこでこんなことを学んでくるんだと思いながら、籐一は立ち上がった。釣られて少女も立ち上がって、少女は籐一の右腕を、ぶら下がるように両手で握る。
「明日も来るでしょ？　籐一」
「うーん。ど、どうかな？　もう絵完成したからまた別のところで……」
「じゃあ、明日はアタシと遊ぼう！　ね？」
少女は籐一を見上げながらピョンピョン元気に跳ねる。そんな可愛らしい仕草に、籐一は思わず頬が緩んだ。

「別にいいけど。つか、君、名前は？　君は俺のこと知ってるみたいだけど、俺は君の事知らない」
その籐一の言葉に、少女の笑顔が少しだけ揺らいだが、籐一は気づかない。それは本当に少しの揺らぎだった。
「アタシ、帆乃香っていうの！」
「そか。俺、もう帰るけど、帆乃香はどうする？」
「アタシはもうちょっと遊んでかえる！」
言う少女こと帆乃香は、籐一から離れて展望台の柵によりかかった。
「分かった。じゃ」
「うん！　バイバイ！　また明日！」
帆乃香は、ブンブンと元気に右手を振りまくって籐一を見送る。
籐一は、そんな帆乃香を少し微笑ましく思いながら、片手だけ軽く挙げて帆乃香に別れを告げた。
「うーん……」
山を降りながら、藤一は少し思案顔をした。確かに自分の中には、帆乃香に該当する人物は存在していない。大体にして、最後にこの村に来たのが十年近く前。帆乃香の外見からして十歳にも満たないだろうから、過去に邂逅することはまず有り得ないわけで。
それでも、どこか引っかかるものを、籐一は感じていた。それは既視感。遥か昔の記憶の中に帆乃香がいるかのような感覚。
しかし、いくら考えても結論は出ない。考え込みすぎて石に躓き転びそうになったので、もう考えるのをやめた。

二日目（3）

家に帰ると、夕焼けでオレンジ色に染まった居間で、美咲がノートパソコンを叩いていた。いつもの明るい笑みをどこかに置き忘れ、悲痛に染まった表情でキーボードを叩いている。

「……ねーさん、難しい顔してどうしたんだ？」

籐一が話しかけてみると、少しびっくりした表情でこちらを向いた後、慌てて笑顔を取り戻す。

「仕事だよ、仕事」

その美咲の言葉に、籐一は壮絶な違和感を感じた。あんな顔をしながらやる仕事なのか。

「……何だよ、ねーさんＯＬの癖にそんな難しい顔してやる仕事があるのか？」

全国のＯＬの方々に袋叩きにされるような台詞を吐くと、美咲はポカーンとした顔を籐一に向けた。

「……アレ？　ねーさんＯＬだったよね？」

「ああ、そういやあ言ってなかったな。やめた。二年前に。あんなエロ上司にセクハラされながらヘコヘコする仕事なんてやってられるか、って転職した」

さも当然であるかのごとくそう言うと、美咲はマウスを動かしてダブルクリックし、ノートパソコンの画面を籐一の方に向けた。

「コレ、今の僕の仕事」

美咲が座っている卓袱台に近づいて画面を見ると、何やら妙に萌え萌えした感じの女の子が乱舞しているウィンドウが開いており、『はじめから』だとか『つづきから』だとか『環境設定』だとか『Ｈシーン鑑賞』だとかのメニューが表示されている。

「え、えらいぶっ飛んだお仕事のようで……」

「シナリオライターだ。ＯＬしてた時に趣味で書いたシナリオをメーカーに持ち込んだら採用された。もう三本、サブでライターやっ

て、今開いてるやつは今年の九月発売のやつで、僕がメインライターやったんだ。すげーだろ」
そういえば、昔から美咲は小説を書くのが趣味だったような気がする。外で元気に遊びまわる反面、夜になったらノートに文章を真剣な顔で書いている姿が思い出される。
将来は小説家になりたい、といつぞや聞いたことがある。つまり美咲は自分の夢を、こういう形ではあるが、叶えてしまったということだ。
正直、うらやましかった。藤一自身は、なんとなく理系の大学には通ってはいるが、未来はまだ漠然としてしまっていて、何になりたいかなんて考えたこともない。なんとなく、公務員にでもなって安定した生活を送りたいとは思っているが。
「はぁー、すごいな。なかなかなれる仕事じゃないだろ」
「まあ、僕の才能だよ才能。うりうり、もっと褒めろ」
と、とても誇らしげだ。しかし、どういう形であれ、もう彼女はプロなのだ。その豊満な胸を張っても誰にも文句を言われる筋合いなんてない。
「いよっ！　流石ねーさん！　俺に出来ないことを平然とやってのけるっ！　そこにしびれるっ！　あこがれるぅーっ！」
「なんかムカつく」
ガスっ、と、かすり気味に拳骨で殴られた。頭に対して垂直で殴られるよりもダメージの大きな殴られ方だった。
「いてえ」
「殴られる方は痛いけど、殴る方は痛くないんだぜ」
「何かいいこと言ってる風に見えて実はろくでもないこと言ってる！？」
美咲は、拳骨を一瞥した後、少し不機嫌そうにパソコンの画面を見て、キーボードに再び両手を置いた。
思案顔で、入力されない程度に指をパタパタ動かしている。
「なんかよー。社長が、感動できるシットリ系もいいけどリョウジ

ョクモノもやってみたいんだよなーとか言い出してよ。そーゆーのはそーゆー専門のメーカーがあるんだから二束草鞋は危険だって言ったのに、新しいジャンルを開拓するのは悪くない。実際にゲームにするかはさておき、文章だけでもちょろっと書いてみてくれってさ。……ったくよー。濡れ場リアルに書くの一番苦手なのにさー」

と。グチグチと小言を、おそらくは籐一に向かって言う。そして、パソコンを避けるように卓袱台に突っ伏し、両手で髪をわしゃわしゃ弄繰り回している。どうやら相当悩んでいるようだ。

「ゲームにリアル性求めなくてもいいんじゃないの？　ユーザも非現実楽しむためにやるんだろ、そういうゲームって。だったらちょっとくらい極端な描写の方が……」

「僕はリアルな描写が売りなんだよーっ！」

畳の上に身体を投げ出してヒステリーのように両手両足を振り回すその姿は、とてもじゃないが藤一よりも年上の女性のそれとは思えない。昔を思い出して藤一が思わず噴き出してしまった。

すると、美咲はジト目で籐一を見て、唇を尖らせる。いかにも自分は不服ですと言わんばかりに。

「なんだよ」

「……いや、別に」

「……お前、さっきまでどこ行ってたんだ？」

起き上がり、机に肘をついていかにも高慢な様子でそう問う美咲。何故そこまで偉そうなんだと言いたくなるほどの態度だ。藤一に笑われたのがよほど不服だったのだろう。

「山行って絵描いてた」

「絵？　ああ、そう言えば藤一絵上手かったよな。今も続けてたのか」

その態度を変え、いかにも意外そうな様子の美咲。確かに小学校の頃上手かったからといってここまで続けているとは美咲も思わなかったのだろう。小学校の頃からの才能を開花させた結果である美咲自身のことは勿論棚の上に置いている。

「うん。他にこれと言って面白いと思えるモノが無いからね。結構色々手を出してみたはいいものの、結局絵に回りつくんだよなー。……趣味としてのコストパフォーマンスは最強だぞ、絵は。鉛筆と紙さえあればいい」
「……うん、それは言えてるな」
妙に納得した風だが、それは美咲自身にも当てはまることなのだから当然なのだろう。表現者として、同じ波長をお互いに感じ取っている感じだ。そして、ふと思いついたように口を開いた。
「……なんで絵描きとかにならずに理系の大学行ってんだ？」
「絵は完全に趣味だ。仕事にするだけの素質もないし、絵描きなんて安定収入の無い職業は嫌だ」
「現実的だねぇ。野心の無い男はモテないぞ」
「無茶言うなこの不景気に」
自嘲的な微笑を美咲に見せると、美咲はニッと不敵な笑みを浮かべた。
つくづくこの人にはかなわない、と藤一は思った。確かに美咲の言うことのほうが正しいと思っている。野心云々はさておき、上昇指向の無さは自分でも悩みになっている。それを完全に見抜かれている形だろう。
「お前が食えなくなったら僕が食わせてやるよ」
「ははっ、なんだそれ。じゃあ俺が主夫になるんだな」
「おっ、結婚式はいつがいい？」
「そうだなー、でもまあ、俺が社会人になったら頼むぜ」
と、藤一は美咲と冗談を言い合い、そのまま自室の方に引き上げた。

藤一の背中をしばらく見つめたまま、美咲はニヤニヤ笑っていたが、藤一が二階の部屋に入った音を聞くと、少しだけモノ寂しげな表情で身体を後ろに投げ出した。
「あんまり、冗談のつもりじゃないんだけどね……”私”。どうす

りゃいいんだろ……」

美咲の独り言は、庭にいる蝉の鳴き声にかき消された。

二日目（4）

縁側に座り込んで、スケッチブックの上に鉛筆を走らせる。今日描いた絵で納得できないところに修正をかけているのだ。

夜風に揺られた風鈴が、チリン、チリンと涼しげな音を立てる。

「藤一君、一杯どうですか」

生粋の都会っ子であるはずなのに、何故か無性に感じる懐かしさに身を委ねていた籐一の思考を、誠吾がぶった切った。声がした斜め後ろを見ると、ビール瓶とグラスを二つ持った籐一が座るところだった。

「ささささ、どうぞどうぞ」

グラスを籐一に渡し、ビール瓶の蓋を開け、口を籐一の方へとむける。

「頂きましょう」

お互いにビールを注ぎあって、乾杯。チィン、と風鈴に負けない涼しげな音が響く。

「そういえば、今日の会合という名の宴会で、籐一君のコト、話題になってましたよ。昨日バイクブンブン言わせたフトドキな若者がいたが、あれは誰なんだと」

その言葉に、籐一は冷や汗が流れるのを感じた。この村に来るときに目が合ったおじいさんの冷ややかな目が思い出される。

「す、すみません……」

「ちょっとこの村が閉鎖的すぎるだけです。多分うちの甥っ子だって言ったら納得してくれました。全く関係のないよそ者は排除しようとする風潮があるんですが、親戚なら全然ＯＫですよ、はい」

それでも、あまりいい気分はしない。あまり外を出歩かない方がいい気がしてきた。

少し不安げに思案していると、居間と壁で隔たれていない台所の奥でドアが開く音がした。

確かあそこはお風呂になっていたはずだ。
「ふぃー。あ、僕も飲む飲むーっ」
赤いホットパンツに白いタンクトップという、極めて露出の高い服装で、タオルで髪を拭きながら現れた美咲が、目を輝かせて藤一と誠吾の間にしゃがみこんだ。
タンクトップの下には何もつけていないわけで、それはつまり豊満な胸の形が生々しく浮かび上がっているわけで、目のやり場に困った藤一はすごく遠い目で夜空を見上げた。
風呂上がりらしい。露出した肌からはまだ湯気が出ており、腕に熱気を感じる。
「藤一君が困ってますよ？　美咲」
「ん？　見るか？　ほれほれ」
と、無駄に谷間を強調して迫ってくる美咲を、藤一は両手でそれを拒んだ。
「いや、いい」
昨日出合い頭にセクハラ発言をした藤一であったが、実はそれほど女性に対して耐性があるわけじゃない。年齢＝彼女いない歴なのだからそれは当然である。
昨日もそうだったが、昨日までは美咲のことを女性として見ていなかったのに、改めて見てみると、男の劣情をコレでもかと言わんばかりに刺激する魅力的な体をしているのが分かる。
「むぅ。結構自信はあったんだけどな」
「美咲。女性というのは恥らいも必要ですよ」
少し頬を膨らせて不服げな美咲に、誠吾は冷静に指摘した。
「今更藤一に恥らいなんて見せれるかよー。昔は裸の付き合いだったんだもんなぁ！」
「小学校とか幼稚園の頃の話だろそれ！」
美咲の言葉に、藤一は顔を真っ赤にして非難した。余計なことは言わなくてもいい、という感じ。
だが、美咲はそんな言葉聞いてはおらず、上機嫌で自分の分のグ

ラスを取ってきて座り込み、ビール瓶を傾けた。
そして、なみなみと注いだビールを、藤一よりも誠吾よりも男らしい動作で一気飲みして見せつけた。
誠吾は少しうんざりしたように溜息をつき、藤一も目を点にしてしまっている。
「ほれ、藤一、もっと飲め飲め」
まだ半分くらい残っている藤一のグラスに、ビールを追加する美咲。藤一は、拒めないまま、されるがままになってしまっていた。

三日目（1）

「おにいちゃーん、起きてー！」
次の瞬間、夜の間に寝相を変えるに従って体に巻きついていたバスタオルが引っ張られ、藤一の体はゴロゴロと畳の上を転がって行って箪笥に激突した。
なんてアグレッシヴな妹だ、と正常な藤一なら突っ込むだろう。
「いてえっ！」
しかし藤一は、何が起こったのか全く理解できないまま目を白黒させるしかなかった。
そして、そんな藤一を覗き込んでくるは、藤一をおにいちゃんと呼ぶには年齢が藤一よりも明らかに上な美咲である。
ジーンズに赤い無地のTシャツという、やっぱりシンプルすぎる服装。しかしやっぱり胸のふくらみは大変なことになっていることが、下から見上げると更によくわかる。顔が半分以上胸で隠れてしまっているではないか。
「……あ？」
「あ？　じゃねーよ。母さんの見舞いに行くからお前も付き合え。以上」
昨日の酒が残っているのだろうか。えらく不機嫌な感じの美咲に戦々恐々としつつ、藤一は立ち上がった。眠い目を擦りながら、ノソノソと、部屋着から普段着へと着替えていく。
部屋を出て、今にも崩れそうな音を立てて軋む階段を下りて居間に入ると、美咲が今時珍しい木枠で出来た台と一体になっているテレビで朝のニュースを見ながら、食卓で一人朝食をとっていた。
「……おはよう」
「おう」
恐る恐る話しかけてみると、意外にも美咲は普通に箸を持った片手をあげて返してくれた。

藤一はちょっとホッとしながら、美咲の対面に座り、伏せてある茶碗に傍にある炊飯ジャーからご飯をよそった。
「おばさんまだ入院してたんだな」
「ああ。医者の許可が出たら時々帰ってくるけど、長くても二週間くらいで病院に戻っちまう」
藤一は、美咲の母親、星野理子を見たことがない。美咲が小さい時に難病になって、それ以来ずっと病院に入院しているらしい。
だから、この家の家事は時子任せなのだ。
「前は結構頻繁に帰ってきてたんだけどな。最近じゃめっきり。ここ一年くらいじゃあ、春に三日くらいしか帰ってきてない」
それはつまり、暗にあまり良くないということを示している。
それがどうしたという感じの口調の美咲であるが、藤一は悪いことを聞いてしまった、という罪悪感たっぷりな気分になった。
しかし美咲は、そんな藤一を見て鼻でせせら笑う。
「そんな顔するなよ。同情される筋合いなんてない。……僕だって。ある程度覚悟はしてるんだからよ」
目を細めながら、美咲が呟き、ご飯を一口分、箸で口に運んだ。
両親が健在な藤一と、美咲の間にある、絶望的な壁を感じた。確かに、ここで下手に同情したら逆に悪いような気がした。これ以上触れないほうがいい、と思った。でも、話題を転換しようにも、上手い口上が見つからない。
藤一が困っていると、当の美咲のほうから助け船が入った。
「よし。終わり終わり。しみったれた話なんて僕と藤一には似合わねーよ」
そう言って、美咲は会話を転換した。
高校の頃の話。テレビの話。大学生活の話。仕事の話。
朝食が終わっても、三十分ほど雑談していただろうか。早朝から裏の果樹園で作業をしていた誠吾が、タオルで汗を拭いながら戻ってきた。
「さてさて。そろそろ行きますよー」

泥だらけになった作業着から、いかにもおじさんという感じの地味な普段着へと着替えていく。
「おばあちゃんは行かないんですか？」
「はい。ばあちゃんには結構しんどいんですよ、車に長時間揺られるのって。だからいつも留守番してもらってます」
まあ、留守番とは名ばかりなんですがね、と、ククククっと悪戯っぽく笑いながら呟いた。
「老人は老人で集まっていろいろ楽しんでるらしいぜー」
言いながら、美咲は出発の準備をするために部屋に戻ってしまった。
藤一は正直、これと言って準備をすることは無い。せいぜい、汗の臭いが少しするTシャツをポロシャツに取り替えるくらいだ。とりあえず歯磨きをするために、洗面所へ向かうのであった。

三日目（2）

村から山を二つ越えたところにある、小さな田舎町。
その外れの山の中腹に、まるで要塞のように構えている病院があった。
古い街並みに全くそぐわない、潔癖の権化のような白い建物。無機質過ぎて、冷たい印象しか藤一に与えなかった。
大体、こんな人口が明らかに少ない町にあるこんな大きな病院、普通の病院なわけが無いのだ。それはつまり、遠く離れた所からわざわざやってくる患者を受け入れることで成り立っていることを示しているわけで。
そんな推測から、彩花の母親、理子がどんな重大な病気であるかが易々と想像できた。
長期入院する患者のための病院で、通院してくる人は極少数なためだろう。無駄に豪華なエントランスに設けられた待合スペースは、一般的な総合病院などと比べて圧倒的に小さい。
入院病棟の五階へと、三人は上がる。
エレベーターを出たら、鼻を刺激する消毒液の匂いが一層強くなる。
昼食の時間なのだろうか。病院食を満載した銀色のワゴンを押した女性の看護師とすれ違う。
「今時の病院は看護婦さんもズボンなんですよねえ。治る病気も治りゃしない」
先頭を歩く誠吾が、自嘲気味に笑いながら、そんな冗談を言う。その言葉に、言い知れぬ感情を、藤一は読み取った。
「エロオヤジー。まあ、ゲームの世界でもズボンなんてあり得ねーけどな。そういやあ、ナースさんの制服を巫女服と修道服どちらにしようって争うとんでもないゲームもあるそうだ。普通に考えて巫女服なんかになったら邪魔で邪魔でしょうがねーだろ、裾とか袖と

か」
　そして、そんな誠吾に冗談で返す、美咲の言葉にも。無理して楽しげにしているような、そんな感覚。
「美咲。無理してそんな変な世界に身を投じなくてもいいんですよ？　私はそういうゲームの存在は美咲が買ってくる雑誌でしか知りませんが、とてもじゃないが正常な世界では……！」
「ぶはっ！？　何で読んでんだよ父さん！？」
「娘がどんな世界で生きているのかを知るのも父親の役目ですよ」
「よっ、余計な御世話だろそれ！？　それに無理してねーよ。僕は望んでこの世界にいるんだからな」
　そんなことを言い合う姿を、一歩下がったところで藤一は見守った。大体にして、藤一もそういうゲームの世界はよく知らない故に口を挟む余地などないのだが。
　しばらく廊下を進んだところにある四人部屋。四枚の名札が掲げられ、そのうち一枚に、星野理子の名前がある。
　頑丈な引き戸を開けて、誠吾が中に入る。美咲もそれに続くと思って、見切り発車で足を進めた藤一は、すぐに立ち止まった。美咲が入口で動かないのだ。
「……ねーさん？」
「ん？　ああ、なんでもない、なんでもない」
　言いながら。少し寂しげな表情でごまかすように言ったあと、病室に踏み込んだ。
　窓際のベッドに、星野理子はいた。
　点滴のチューブだらけの痛々しい腕を晒し、酸素マスクで口元を覆われた女性が、ベッドに埋もれていた。
「理子、来ましたよ」
　誠吾が、そう言って、眠っている理子の額に唇を付ける。
　藤一は、理子の姿を見て、思わず目を背けたくなった。骨と皮、と形容してもいいような痩せた体。薬の影響だろうか。一本も髪がない頭を隠すように包帯に覆われた頭。病的に青白い肌。

顔つきはひどく若く見える。その百五十センチくらいしかない身長も相まって、美咲の妹と言っても通用しそうだ。
自分がここにいてはいけないような気がして、藤一はちょっとだけソワソワしてしまう。
病室を出ていようか、とすら思った。
しかし、藤一が着ているポロシャツの裾をつかんだ、隣に立っている美咲の、不安に塗れた横顔をみて、その気持は吹き飛んだ。自分はここでしっかり立ってないといけない、と気付いたのだ。
「失礼しまーす。あ、星野さん。先生がちょっとお話したいことが、って」
仕切りのカーテンを開けて、点滴の替えを持って来た若い看護師が告げる。
「ふぅー、今回はどこが悪くなったんでしょうねぇー」
藤一は、その声を聞いて、背筋に怖気が走るのを感じた。余りにも嫌味な色に塗れすぎて、楽しんでいるかのような声色になってしまっているのだ。
病院に来るたびに、誠吾は自分の妻の状態が悪くなっていくのを目の当たりにしてきた。最早、定例行事のようになってしまっている。
誠吾は肩を大きくすくめながら、病室から出て行く。看護師は、その背中を酷く哀れそうな瞳で追った後、藤一と美咲に一瞥して点滴の薬を交換した。
看護師も出て行き、美咲と藤一と理子がのこされる。
「最近は二時間おきくらいに、寝たり起きたり繰り返してるんだよ。そろそろ起きるんじゃね？」
言いながら、壁にたてかけられた見舞客用のパイプ椅子を取り、理子の横に座り込む美咲。いつもの能天気そうな彼女からは想像もつかない、憂いの色。
しばしの無言。藤一としては何を言っていいか分からないし、そもそも美咲が会話を拒絶しているような風にも見えた。

次の瞬間。その静寂を、美咲の携帯電話が破った。おそらくは何かのゲームの音楽であろう。妙にアップテンポで甲高いアニメ声の女性が意味不明な歌詞を早口で歌っている。少なくとも、一般に流通して流行るような音楽には聞こえない。

「……わりい。会社だよ、クソ。はいはいもしもし、星野です」

美咲は、少し機嫌悪げに言い残して出て行ってしまった。

そして、そこに藤一と理子だけが残された。

理子は寝ているとはいえ、少し気まずい。

壁によりかかって、バツの悪そうに白い天井に視線を泳がせる藤一である。

この病院に来てからの、美咲や誠吾のことを思い出す。空元気という脆弱な殻を持った狼狽。確かに、何年も家族がこんな状態だと、ああなってしまうのもしょうがないのかもしれなかった。

「あらぁ？」

今にも消えそうなか細い声。しかし、そんな声でも、物思いにふけっていた藤一を驚かすには十分だ。あわてて理子のほうを向くと、酷く優しげな、しかしまるで少女のような好奇心を孕んだ瞳を藤一に向けていた。

「ひょっとして藤一君？　いい男さんになったねー」

「……あ、あの。はじめまして、では？」

少なくとも。藤一は理子と面識がなかった。幼い頃、星野の家に遊びに行っても、この女性はいなかった。

「そんなことないよ。おしめ替えてあげたことあるのよ？」

「ああ、なるほど。失礼しました」

と。動揺を隠すような少しわざとっぽい照れ笑いを浮かべて、パイプ椅子に腰かけた。ギッ、と椅子の足が軋む。

「ええっと、確か美咲の二歳下だよね。えーっと、大学生？」

「はい。K大学の情報学部に行ってます」

「あらぁ、優秀なのね」

言って。理子はその今にも折れそうな細い腕を使って、ノロノロ

と上半身を起こした。布団から出てきた体は、入院着の上からでも分かる、痛々しいまでの脆弱。
「もうねぇ、最近めっきり体が動かないのー。そういえば誠吾と美咲は？」
「伯父さんは医者の所に行ってます。ねーさんは会社から電話です」
「そう。この前、美咲がなんか変なことする会社に勤めてるーって誠吾が嘆いてたんだけど。エッチなゲーム作る会社なんでしょ？藤一君どう思う？」
　言いながら、理子はベッドの傍にあるテレビ台の上に放置してあるマグカップに、ペットボトルに入った水を注いだ。
「俺は、なんか羨ましいですよ。そりゃあ、なんかニッチな需要を満足するための会社でしょうけど、仕事を楽しんでるように見えますからね。楽しんで仕事できりゃあ、万々歳でしょう」
　なるほどねぇ、と呟き、水をズルズル啜る理子である。やはり多少の不満が見え隠れする。確かに自分の子供がアダルトゲームのメーカーに勤めているなんて、あまり胸を張れたことではないと思われる。親としては心配なのだろう。
「うーん。まあ、藤一君が言うなら……」
「俺どんだけ信頼されてるんですか」
「相当ね」
「相当ですか」
　そんなに立派なことやってきたわけじゃないんですけどね、と続けて独り言のように呟きながら、頭をバリバリ掻く。今まで全く会ったことが無い人に信頼される。それはつまり、美咲や誠吾の自分への評価が高いことが間接的に伺える。嬉しくないことは無いが、やはり気恥ずかしい。
　コトッ、と音を立ててマグカップをテレビ台に置いた後、悪戯っぽい笑みを浮かべ、藤一の方へと軽く身を乗り出してくる。
「ねねね。藤一君は、美咲、どう思った？」
「どう思った、って言いますと」

「美咲、変わったと思う？」
言われ、考えた。確かに外見は当然のごとく変わっている。藤一が戸惑うほどの美人に変わっているし、体付きだって女性的な魅力が満載されて重量オーバーしていることは、昨日までに嫌というほど分かった。
だが、内面はどうだ。粗暴だし、藤一の事情などまるで無視して振り回す。かつてのボーイッシュな少女のそれのような気がする。一人称も、”僕”で変わっていない。
そのことを曖昧に告げると、理子は口元に手を当ててクスクス笑った。
「そう。上手いことやるものね」
「上手いこと？」
「ううん。こっちの話、こっちの話」
と。理子は藤一に指摘されて慌てて両手を振った。挙動が一々少女じみていて、藤一はちょっと調子が狂うのを感じた。
「はあ？　そうですか」
あまり言及するのもどうかと思う。
そして、丁度病室の外から帰ってきた美咲を見て、小さく笑う理子に、美咲は頭にクエスチョンマークを浮かべるばかりだ。
「どうしたんだよ母さん？」
「あー、おかし。……何でも無いわ。ねえ、藤一君」
理子に話を振られ、美咲がジトッとした目で藤一を見るが、藤一も今一話を掴めない。とりあえず年長者に話を合わせることにした。
「ああ。どうやら何でも無いらしい」
「なんかむかつく」
ガスっ、と、かするように殴られる藤一。全くの濡れ衣であった。

三日目（3）

帰りのバンの中は、沈痛な表情の誠吾と、はぐらかされて少し機嫌の悪い美咲と、この重い空気に必死で耐える藤一の三人によって、まるで黒いオーラを纏っているかのような、どんよりとした空気が充満されていた。

そして結局、終始無言のまま、星野家に到着する。

藤一は、一旦部屋に戻り、気晴らしのように、スケッチブックと色鉛筆を持って家を出た。

しばらく村の中を徘徊する。農作業をしているおじいさんの視線が微妙に痛い。

田園地帯を抜け、商店や村役場が集まっている区画まで行ってみる。未舗装の道路に藁ぶき屋根の商店。モチーフとしては風情があってよろしいのだが、あんまり開けたところで目立った行動は避けたかった。どうにも、心から歓迎されていないように感じるからだ。昨日、誠吾はああ言ったものの、全く気にしないのも問題であると、藤一は思っている。

結局、村の外れにある沢へとやってきた。岩場を流れる小川の岸の大きな岩に腰かけてみる。しばらく思案した後、スケッチブックを開いた。

鉛筆を走らせながら、先ほどの理子との会話を、少し思い出してみた。

美咲が変わっているか、という問いに対して、藤一は変わっていない、と答えた。少なくとも内面は。そしてその言葉に対して、上手いことやるものね、と。

（なんだ？　何を上手いことやっているんだ？）

一緒に会話をしていても、なんとなく、幼稚園くらいの時に渋々付き合わされた”おままごと”をしているような気分にすらなる。それほど、藤一は全く違和感なく、相変わらず粗暴で強気な美咲に

尻に敷かれつつも、普通に接している。
（……本当におっぱいしか変わったところ無いじゃなねーかよ）
以前最後に出会ったとき、彼女の胸は哀れなほど平たかったはずだ。身長は、早熟な女の子特有の高さだったが。
それが今はどうだ。あの、シャツを大きく突き上げる魅惑的な肉の塊が二つ。そんなものをぶら下げて、昔のように無防備な姿で接せられて。普通に接している時でも、それを意識してしまうと色々とまずいことになってしまうわけで。
「ていうか俺この前からおっぱいのことばっかり考えてるじゃねーかくそがーっ！　中学生かっつーの！」
藤一は健やかな爽やか系大学生を目指していたりする。しかし内面はこの体たらくである。その自分の理想と現実のギャップに苦悶する藤一である。
「おっぱい？」
「うおおっ！？　アーっ！」
背後から、甲高い少女の声がし、心臓を鷲掴みにされたように驚いた藤一は、その場で飛びのいた。川へと一直線である。
水位自体は、立てば膝くらいである。今の藤一のように尻もちをつくと、胸くらいの深さ。要するに水遊びをして濡れたというレベルでは無い。
冷たい水にいきなり落ちて心臓が止まりそうになりながら、藤一は顔にかぶった水を手で拭って川べりの人影を見た。
案の定というか。帆乃香であった。
「いひひ。大丈夫？　藤一」
台詞自体は藤一を心配するものだが、その顔には悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。
「……お前を川に引きずり込んでやろうかーっ！」
勢いに乗って立ち上がると、帆乃香はケラケラ笑いながら三歩ほど後ずさった。
「きゃー！　おかされるー！」

「子供がそんな事を言うんじゃありません！」
川から出ると、藤一はその水を含んだ服の重さに少々驚きながら、右手に持っていて全部濡れてしまったスケッチブックを閉じ、その辺に転がっていた色鉛筆をケースに仕舞った。
「山で待ってたのに！　来ないから探しに来た！」
「……あー。ごめん。うっかりしていたよ」
そういえばそんな約束をしていたような気がする。藤一はあまり申し訳なくなさそうに言いながら、スケッチブックと色鉛筆を重ねて右手に持った。
「バツとして！　今日はアタシと遊んでもらいます！」
まるで死刑を宣告するように、思い切り背伸びしながら、右手の人差指で藤一の額ツンツン突く帆乃香。
藤一は帆乃香に頭を揺さぶられながら、考えた。
とりあえず、水に落ちたと同時にテンションも急落している。靴じゃなくてサンダルだったことだけが幸いした。もし靴だったら精神的ダメージが更に数倍に膨れ上がっていたところだ。
「あー、うん。いいよ」
だがしかし、悪いのは自分である。あまり気分は乗らないが、遊びに付き合うのが筋というものだ。
「あはっ！　じゃあ、虫捕りしよう！　虫捕り！」
藤一はちょっとだけギクッとした。生粋の都会っ子の藤一は、正直、虫は苦手だった。この村によく来ていた昔は、美咲と一緒に虫捕りもしたものだが。
そんな藤一の気持ちなど露知らず、帆乃香は藤一の腕をグイグイ引っ張るのであった。

三日目（4）

「うわぁ……」

大人になると、昔は平気で触れた昆虫が触れなくなっていたりする。カブトムシなどはその最たるものであろう。

角があるほうはまだ良い。角には男のロマンが詰まっているから、ギリギリ許すことができる。

しかし角が無い方はどうだろう。巨大な黒いカメムシ、もしくは太ったゴキブリのようであり、不快害虫に分類すべきだと藤一は思った。

その白いワンピースが汚れるのもいとわずに猿のごとくスルスルと木に登って捕まえてきたカブトムシ♀に、藤一が酷い嫌悪感を示すと、帆乃香はその悪戯心を存分にくすぐられたのか、ニマーっとした笑みを浮かべた。

その小さな手で摘んでいるカブトムシ♀の、よりにもよって腹側、今にも折れそうな細い六本の脚を細かくそれぞれを無作為に動かすグロテスクな様子を、藤一に見せつける。

「くっ、そ、その程度の攻撃が俺に効くと思うかってうぉっ！」

藤一のシャツにカブトムシ♀を掴まらせようと押し付けようとする帆乃香を、藤一は一歩下がってかわす。

その様を面白がって、カブトムシ♀を突き出したまま再び一歩進む帆乃香と、一歩下がる藤一。

「オーケー、オーケー。ちょっと冷静に話し合おうじゃねぇか、帆乃香さんよぉ？　だからまずはその黒光りするブツを下ろせ。な？　な？」

まるで、安いアクション映画において、敵に拳銃を突きつけられた小物である。

「きゃはははは！　怖いの藤一ーっ！」

「や、やめろおおおおお！」

狂喜的な笑みを浮かべて一気に間合いを詰めてくる帆乃香に、藤一は年甲斐もなく走って逃げだした。
「まってー！　こんなに可愛いのになんでなんでー？」
「可愛くないっ！　可愛くないぞうおおおおお！」
子供とは。時に、大人が想像がつかないほど残酷な存在となる。
藤一はそれを心の底から思い知りながら、情けなくも帆乃香に追いかけまわされることとなった。

三日目（5）

いくら山間部で涼しいと言っても、全力で走りまわればそれなりに疲れる。

本来ならば１９歳の藤一と、どう多く見積もっても年齢二桁にも及ばない帆乃香。走る速度は次元が違うほど藤一の方が早い、はずであった。

だがしかし。

「や、やめろ、やめろってばぁーっ！」

「あはははは！　待ってよ藤一ーっ！」

そんな速度の差は、平地で走った時に適用されるものだ。

「うおっとおお！」

斜面に埋まっている石を飛び越え、危うくこけそうになりながらも、持ち直す藤一と、全く速度を落とさずに飛び越え、あたかも平地のごとく走ってくる帆乃香。もう、カブトムシ♀無しの帆乃香単体でも十分に恐怖を覚えそうな異様さである。

生粋の都会っ子である藤一は、山歩きもあまり慣れていない。何度躓いて転びかけたことか。ズボンが濡れて気持ち悪いのも、全力を出せない要因の一つである。

対する帆乃香は、膝をサスペンションにして地面の凸凹を全て殺し、あたかもここが舗装された平地であるかのごとく、白いワンピースの裾をバタバタはためかせながら、平然と走ってくる。

結局、商店、村役場地区までやってきたところで、飽きた帆乃香がカブトムシ♀を草むらにポイ捨てしたところで、必死の鬼ごっこが終了した。

「あー。疲れた」

「ばっ、ば、バカ野郎が……っ！　ひ、人が嫌がることを、やるんじゃありません！」

全力で運動した後特有の、喉や脇腹に走る激痛に歯を食いしばり

ながら、息を少しずつ整えながらそう非難する藤一であるが、帆乃香はケロッとしている。
「藤一、ジュース！　ジュース買って！」
確かに喉がカラカラである。しかし、藤一の意見を返すのを待たずに、商店の方へと駆けて行く。なんて厚かましい子だ、などと脳内で愚痴りながら、藤一もその後を追う。
「せっちゃーん、ジュース！」
藁ぶき屋根の商店に入りながら、帆乃香はそう叫んだ。その、同年代の友人に対するような口調。帆乃香みたいなのがもう一匹いるのか、と思いながら藤一も続いて入ってみると、しかし店の奥のテーブルには、もう九十歳くらいは行っていそうな気難しそうな老婆が一人座って、膝の上で猫を撫でているだけだ。
帆乃香が、都会ならばレトロな居酒屋等にしか置いてなさそうな、有名ジュースメーカーの三代ほど前のロゴが入った冷蔵庫から、瓶入りのジュースを二本出している。
「あー、二百円なー」
しわがれた声で、やはり同年代のような親しみのこもった声で返す老婆に、藤一は微妙に心地よい気分になりながら、ずぶ濡れたポケットから財布を取り出し、五百円玉を取りだした。
「すみません、五百円でお願いします」
「あいよ」
猫を撫でていた右手で、年季の入ったレジを、プルプル震えている右手で操作しながら、老婆は藤一の顔を見た。
「あんた、星野の甥っ子か？」
「え、あ、はい、そうです。なんか、来たときに迷惑かけたようで」
「なんかやったのかい？」
「いえ、なんか、バイク煩かったですよね」
「そんな細かいこと気にするもん、おりゃあせんよ」
言いながら、レジから取り出した三百円を藤一に手渡した。
「”ほの”が、懐いてるみたいだね」

「いや、はは。なんか引き摺り回されてますよ」
渡された三枚の百円玉を財布に入れながら、少し他人行儀な笑みを浮かべた。
老婆は、その気難しそうなしかめっ面を和らげる。
「ありがとうね、”ほの”と仲良くしてくれて。いつまでおるんか知らんけど、よろしく頼むわ」
「え？　あ、はあ、了解しました」
何故そんな事をわざわざ言うのか分からなかった。怪訝な顔をしつつ、藤一は老婆に一礼して外に出た。
瓶を回収する箱の前で帆乃香が腰に手を当ててジュースを一気飲みしているところだった。
「なあ。あれ帆乃香のばあちゃん？」
「げふー。お友達だよ？」
そうシレっと言う帆乃香は、空になった瓶を箱に入れ、傍にある今にも崩れそうなベンチに置いてある藤一の分を手渡し、ベンチに座り込んだ。
「早く飲んでよー。もっと遊ぼう！」
「あー。うん。そうするか」
瓶の蓋に付いているフックに指をかけ、思い切り引っ張って開封。ポンっと、気持ちいい音が響いた。

三日目（6）

狭い村だ、と思っていたが、徒歩で駆け回ってみると結構広い。結局、帆乃香に連れられて日が暮れるまで村中を引き摺られて、いつしか童心に返ってしまっていた藤一は、体中ボロボロになりながらもどこか清々しい面持ちで星野家へと帰ってきた。

「帰りましたー」

居間で丁度食卓を広げる準備をしていた祖母である、釣り気味の時子の隻眼と、その遺伝であろうやはり釣り気味の美咲の瞳が、藤一の方を向く。

「おいおいおい何だよそのかっこ！　ひでえな！」

「男の子なんだから、それくらいで丁度ええ。風呂はいってきんさい！」

年甲斐も無く無茶をしてきた籐一を笑いながら馬鹿にする美咲と、いつまでも子供扱いの時子。予想通りの反応に、籐一は苦笑いを浮かべ、風呂場へと向かった。

乾いた泥でザラザラになった服を脱ぎ捨て、古いタイルで覆われた風呂場へと入り、蛇口を捻って水のようにぬるいシャワーを強めに出す。

シャンプーを使って頭を爪を立てて洗い流すと、汚れた頭に付いた泥が溶けていく様が、酷く心地よい。

正直に言うと、今日はかなり楽しかった、と言える。否応なしに、美咲と、十年前まで毎年夏になると一緒に遊んでいた時のことを思い出してしまう。

あのテンションは、嫌い、ではなかった。

かつて藤一はあまり自己主張が出来る子供ではなかった。酷い人見知りで、一人の世界に閉じこもって、誰からも相手にされない子供だった。自分が出来ない、人と仲良くするということを平然とやってのけ、構ってくれる美咲を見て、藤一は恋心に近い、憧れの念

を抱いたものだ。
帆乃香は、我儘で藤一を振り回しまくって”くれた”美咲に、重なる。帆乃香の唯我独尊ぶりが、懐かしいものだと感じてしまった。
きっと自分が小学生だったら、帆乃香に恋していたんだろうな、としみじみ思う。幼い頃美咲に感じた憧れと同様の気持ちを抱いていたに違いない。
しかし残念ながら藤一は幼女嗜好趣味は持っていない。友達として一緒に遊ぶのはいいと思うが、性的嗜好を満たすのは、どうあがきまわって裸で逆立ちしても無理というものだ。多分。
体を洗って、湯が張ってある風呂桶には入らずに、タオルで体を拭いて外に出て着替える。
居間へ向かうと、丁度四人分の夕食が出来ているところだった。
「おっと。交代しましょうか」
言って、農作業をして藤一同様に泥だらけの誠吾が交代でお風呂へ向かった。
「すみません、お先に頂きました」
「いえいえ。別に優先順位なんてありませんよ。美咲だってそんなこと気にしませんしねえ？　オトウサンノパンツトイッショニセンタクシナイデー、なんて言い出さなくて父親ながらほっとしてます。いい子に育ってくれたもんだ―」
と、美咲を少しからかう様な口調で言い残して風呂場へ向かう誠吾を見送った藤一に向かって、食卓についてテレビを見ている美咲が、口を開いた。
「そんな心配しなくても小学校の頃から別々で洗ってるんだけどなー。父さんの服、尋常じゃないくらい汚れるからばあちゃんも別に洗ってるのに」
「ぶはっ！　叔父さんドンマイすぎる！」
失礼ながら、藤一は噴き出してしまった。自分の服が、十数年前から一人で洗濯機の中で空しく回っていたことを知らないのは本人だけである。知らぬが仏、という言葉がここまでシックリ来ること

があっただろうか。
「内緒な？」
悪戯な笑みを浮かべて人差し指を口元に持っていく美咲に、藤一も同様のジェスチャーをして首を縦に振った。
「分かってるよ。やっぱ父親は遅かれ早かれそういう星の下に生まれてるんだよな、うん」
そして、ああ、無常。と、肩をすくめながら、藤一用の茶わんと箸が置かれた美咲の隣の席についた。
「じゃあ、父さんを放置して。お先に、いただきまーす」
美咲の号令と共に、夕食の時間が始まる。
「頂きます」
「はい、どうぞー」
この家では大黒柱の威厳などどこにも無いのであった。

四日目（1）

いやな予感はしていた。なるべく考えないようにしていたのだが、昨日川に一緒にダイビングしたスケッチブックを、一か八か、一晩かけて乾かしてみたはいいものの、ヨレヨレなただの紙切れへと変わり果ててしまっていた。

紙と鉛筆だけあればいい、とは言ってみたものの。いざチラシの裏などの普通の紙を使わねばならぬ場面に直面してみると、抵抗がある。

というわけで、村の中にある雑貨屋らしき店舗にダメで元々、という諦めの境地で入ってみたところ、案の定、生活必需品と言うような文房具は置いてあるが、趣味で使うような文房具は置いていない。

「ごめんね。ああ、でも明後日商品が入るから、その中に紛れ込ませといてあげるよ」

と、お店の人らしき中年の女性のご好意によって何とかなりそうな感じではある。

まあ、絵と離れるのもたまには良いだろう、と思ったが、それはそれで、どのようにして暇を潰そうか本気で悩んだ。

籐一には絵以外に趣味らしい趣味が存在していないのだ。

一応、情報系の大学に通っているが故に必需品とも言うべきノートパソコンは持ってきている。何の奇跡か念力か、インターネットも繋がっているらしいから、たまには引き篭もるのもいいか、などと考えてみた。

「おにいちゃーん、朝だよー」

部屋のドアが力強く開け放たれる音と共に耳に突き刺ささってくる、詩織のその甲高い声を聞いて、布団をかぶりなおした。

硬く閉ざされた俺の瞼は、どう頑張っても開きそうにない。明らかな睡眠不足。昨日、夜遅くまでモンスターを狩っていた自分を恨んだ。
「あと五分だけ……」
「だめー！　遅刻しちゃうよ！」
詩織は俺を夢の中へ没落しないように布団の上から揺さぶってくる。有難迷惑極まりない。
「んもー！　えーい！」
と。小学生故に軽い妹の体が、俺の体の上へと、思い切り跳躍し、ボディプレスするように下腹部に着地した。そこには生理現象故に朝になると不可抗力で膨張する器官があり――

籐一は、自室の畳の上で股間を押さえながら、床をゴロゴロ転がり回った。
「うぐふぅ……」
テレビで野球の”チン”プレー映像を見ただけでも結構なダメージを食らってしまう、変なところで感受性豊かな籐一にとって、今この液晶モニターの向こうで繰り広げられている惨劇は、言葉どおり万死に値する。
後で、巨大化した男性のポケットモンスターへ垂直にダメージを与えることが一番まずいことを、シナリオライターであるハンドルネーム『早乙女アゲハ（笑）』、本名『星野美咲』に小一時間ほど説教してやることにしよう。こんなもの、別の意味でＲ－１８だ。発売したら漏れなく世の男たちのトラウマとなり、ＥＤになってしまうこと必至。
創作物の中とは言え、こんなに残酷なことをするなんて。出産する痛みが女性にしか分からないように、暴れん棒将軍への暴力によって受ける痛みの深刻さも男性にしか分からないのだ。いや、これはひょっとしてエッチなゲームの世界にのめり込んでいる男達を三

次元へと矯正させるための、早乙女アゲハ（笑）の優しさなのではないだろうか。
気を取り直し、再びマウスを握り、文字を読み進めていく。
スケッチブックが無いから暇だ、と美咲にボヤいてみると、嬉々としてこのゲームを貸し与えてきた。籐一としては乗り気ではなかったが、暇を持て余しすぎた挙句にプレイし始めた出鼻をいきなり下半身への暴力描写で挫かれた形であった。

四時間後。
「おーい夕飯……うぉ！？」
美咲が籐一の部屋に入ると、床に転がる丸めたティッシュに囲まれた籐一の後姿があった。
「……ぬ、抜きすぎだろ」
だが、その美咲の言葉に籐一は別に恥じる様子も無く後ろを振り向き、涙と鼻水をティッシュで拭いながら立ち上がり、引いている美咲の両肩を握り締め、前後にガクガク揺さぶった。
「何故殺したし！　何故詩織を殺したあぁあああ！」
「あー。いきなりバッドエンド踏んだかー。というかそこまで感情移入してくれるなんてライター冥利に尽きるだな。ヒロインを殺すっていう王道バッドエンドはまだ通用するんだな。……テストプレイという名目だから後でアンケートに答えてくれよ」
慟哭する籐一と、製作側の立場として酷く冷静に分析する美咲という若干シュールな光景が繰り広げられた。

四日目（2）

夕食後、自室に引き上げた籐一であったが、結局昼に雑貨屋に行った以外に外出せずに部屋に引き篭もってゲームをしていたので全く疲れておらず、更には朝も昨日の疲れで昼まで寝ていたので、当然のごとく眠れない。

しかし、先ほどバッドエンドを踏んでトラウマになっているので、ゲームを起動する気にはなれない。

電気を消して暗くなった部屋の中で、籐一は何度も寝返りを打つが、眠りに落ちる気配は無い。

網戸だけにしている窓の外から入ってくる、正体不明の虫の鳴き声がやけに大きく聞こえる。

こういうときは、無理に寝ようとしたら余計に眠れない。意を決して起き上がると、枕元の腕時計を付け、そのまま部屋を出た。

居間で寝ているであろう誠吾と時子を起こさないよう、一段降りるだけで喧しく軋む古い階段を、なるべく軋ませないように極めて慎重な足取りで降りていく。

ギィ、と一際大きな音を立てて廊下が悲鳴を上げ、藤一はその場で立ち止まった。しかし、襖一枚隔てた居間では人が動く気配は無く、意外なほど大きな誠吾の鼾だけが聞こえてくる。

一つため息をついて、玄関へ。さも当然のように鍵がかかっていないどころか鍵が存在していない玄関の引き戸を開け、外に出た。

暗い。明かりらしいものが、遠くの商店地区のほうにしか見当たらず、近隣の家は全て寝静まっている。

「……」

散歩してみよう、と思って外に出たはいいものの、意外なほど暗い田舎の夜に、身震いを一つして、しかし脚を踏み出した。虫や蛙の鳴き声が不気味だ。

気持ち早足で、田んぼに囲まれた農道を歩いて行く。

しかし、一度暗さに慣れれば、これほど良い散歩条件は無いと言える。山奥とは言っても昼間はそこそこ暑いが、夜になると十二分に涼しく、時折吹く弱い風は心地よい。

いつしか籐一は、小さく鼻歌を歌いながら歩いていた。田園地帯を抜けて商店地区の方へ行ってみたり、道すら外れて川沿いに下りてみたり。

夜の風景も描いてみたら面白いかな、などと思い、モチーフを探す目で歩き回っていると、ふと見た先にある違和感に、籐一は軽く心臓を掴まれたような感覚に陥った。

川沿いの林の大きな木から川の方に張り出した太い枝の上に、巨大な白い物が存在していた。夜の黒い世界に場違いなまでに映える、白いその大きな物体が、梟のように枝に止まっている。枝の下にも大きく突き出している部分は、まるで柔らかい布のように風にひらひらと舞っている。

しかし、残念ながら籐一は非科学的なものは信じないことにしている。理論で証明出来ない物はこの世に存在しない。理系の性である。

瞬間的には驚いてみたものの、少し近づいてみると、それが幽霊でもなんでもなく、人であることが分かった。

「……こんな時間になにやってんだよ」

木の枝に藤一に背中を見せて座っていた帆乃香が、驚いた様子で振り返ると、麦藁帽子から伸びる黒髪がバラバラと靡いた。

「な、なんだ、籐一かぁー。びっくりさせないで」

目を見開いていた帆乃香が、心底安心した声を上げた。少し距離があるのでその表情は窺い知れないが、きっとあまり彼女が見せない表情を見せているはずだ。

帆乃香は、枝を伝ってやはり猿のようにスルスルと木を降りて、白いワンピースに付着した葉や木の皮を軽く払って籐一の方へ駆け寄った。

「お前、家はどうしたんだよ？」

「んー」
帆乃香は、左の人差し指を軽く頬に当てて首を傾げた。
はぐらかそうとしているかのような、もしくは言葉を選んでいるかのような挙動である。怪訝な顔をした藤一を見た帆乃香は、慌てて両手を背中の方で組んではにかんだ。
「なんだか眠れなくて。あ、と、藤一は？」
「……帆乃香に同じく、って感じだな。引き籠ってたから全然疲れてないせいで眠れない」
「じゃあ、お話しよう！　お話！　そしたら眠くなるってきっと！」
と、帆乃香は藤一の右手に縋りついて、大きな石の近くへ藤一を引っ張っていく。
「お、おいおい、暗いから気を付けろよ」
帆乃香をたしなめつつ、ふと左手の時計を見ると、午前十二時二十分。いくら自由奔放な田舎の子供でも、本来ならば出歩いていい時間では無かった。

四日目（3）

「ぐすっ、ぐすっ、うえぇぇ……」

黒ずんだ木の板張りの倉庫に、少女が啜り泣く声が響いていた。

農作業用の道具だろうか。藤一も見たことが無いような木製の農具が立てかけられている。

「帆乃香？」

倉庫の端で蹲って、藤一に背を向けて泣いている少女は、おそらくは帆乃香であろう。しかし、その服装はいつものワンピースではなく、薄汚れた浴衣に身を包んでいた。

「おい、帆乃香」

藤一は、帆乃香の方に歩み寄りながら声をかけた。しかし、当の帆乃香は、それに気付かないのか、振り向きもせずに泣き続けている。

更に近づいて。ようやく藤一は、ギョッとした。

浴衣の袖がまくれ上がって露わになった腕に刻まれた、傷。刃物で切ったようなものや、木の枝か何かで抉ったかのようなものが、縦横無尽に刻まれているのだ。

そして、同様に傷が入った脚の、右足首に、鉄製の足枷が嵌められ、そこから伸びた鎖は壁に打ち付けられた金具に繋がれていた。これではろくに歩くことも出来ない。

「お、おい！　帆乃香！　帆乃香！」

藤一が、帆乃香の肩を叩く。叩いた、はずだった。藤一は、叩いた姿勢で暫く唖然としていた。

右手が。帆乃香の体を貫通していた。藤一の手には、帆乃香の感触が何一つ感じられない。左右に振ってみても、掌に感じるのは空気の抵抗のみ。

「な、なんだよ、なんだよこれ！？」

驚きの声を上げた、次の瞬間。

バンっ、と、倉庫が崩れそうな大きな音を立てて、ドアが開いた。
「ひっ！？」
帆乃香が、驚きの声を上げて振り返る。丁度帆乃香からは藤一に隠れてドアの方は見えないはずなのに、しかし帆乃香はドアの方を見据えている。
藤一も、驚いて馬鹿みたいに打つ心臓を右手で押さえながら振り返ってみる。
そこには、十五、六ほどの少年が立っていた。その身なりは、まるで時代劇から出てきた農民の子供のような姿である。
「い、いや！　こないで！」
帆乃香が、少年達を見て、座り込んだまま、拒絶の言葉を吐いた。必死に後ろに逃げようとしているが、そこにはもう壁しか無い。
「よそ者！　物の怪！　今日は俺の親父が死んだ！　どうしてくれる！　と、トキも！　トキの左目も、結局治せねえって！　お前が奪った！」
少年の一人が、木の枝を持って帆乃香の方へと歩み寄りながら悪態づいた。
その瞳は、どうしようもない憎悪の念で燃え上がっていた。
「ちょ、ちょっと待てお前！」
藤一は慌てて少年を遮ろうと前に出たが、案の定、という感じで、少年は藤一の体をすり抜け、帆乃香の方へと近づいていく。
「くそっ！」
少年を止めなくては帆乃香が危ない。藤一は祈るような気持ちで少年を後ろから羽交い絞めにしようとするが、その腕はやはり空ぶる。
「返せ！　親父を、返せ！　トキの左目を返せ！」
少年が、右手の枝を振り上げる。叩くような持ち方では無い。乱暴に折ってきたのか、ささくれだって複雑に尖っている、その断面を、怯え切って、念仏のように拒絶の言葉を垂れ流す、帆乃香に向けて。

振り下ろす。枝を。帆乃香の脚に、狙いを定めて。
藤一は、思わず目を反らした。
「ぎゃぁぁあ！」
次の瞬間、帆乃香が、甲高い、獣のように耳障りな悲鳴を上げ、藤一は両耳をふさいだ。
「いっ！　いだ、いだいっ！　やめでっ！」
「しねっ！　しねっ！」
反らしていた目を戻してみると、そこには、見たことを後悔するかのような惨劇が繰り広げられていた。
狂気に満ちた瞳で、血塗れの枝を、何度も、何度も、帆乃香の脚に振り下ろす少年。必死に抵抗しようとするが、男女の差というよりも、年齢の違いで絶望的なまでに違う筋力の差で何も抵抗できずに倉庫の床をのたうち回る帆乃香。
腿に深く突き差し、血飛沫を上げる傷口から抜かれる枝が、帆乃香の脚の上を踊り回っている。
「いぎゃあああ！」
より一層深く突き刺さした枝を、少年は憎悪の瞳で、床をのたうちまわる帆乃香を見つめながら、枝をグリグリと動かす。傷口がどんどん広がり、血が噴き出した。
藤一には想像もつかないような痛みを、帆乃香に襲いかかっているだろう。
「あがあぁあああ！　も、もういゃだあああああ！」
帆乃香が、一層大きな声で悲鳴を上げる。
「ぐっ！？」
藤一は目の前が真っ暗になった。いや、そうではない。周りの景色が夜の帳を下ろしているだけだ。
すぐそこを流れる、小川のせせらぎを打ち消すように、藤一の心臓は早鐘を打つ。
大きな岩にもたれかかって座っていた。ふと見ると、先ほどまで残虐行為に晒されていた帆乃香が、ワンピース姿で、藤一の膝に頭

を預けて眠っていた。
「な、な、何だ今の……」
夢だったのだろうか。それにしては、異常に生々しく感じられた。
夜中に出会った帆乃香と、ここで暫く談笑していたところから、記憶が無くなっていた。時計を見ると、午前一時を回っていた。
嫌な汗が浮かんだ額をシャツで拭い、上を向いている帆乃香の寝顔を見た。先ほどまで激痛に歪んでいた帆乃香の顔は、今は間の抜けた、可愛らしい寝顔に変わっている。
ふと。右手で、少しだけ帆乃香のワンピースの裾をまくってみると、幼児体型を地で行く、太目で健康的な脚が露わになった。枝で傷付けられていたはずのそこは、至って綺麗なものである。
「夢……。そ、そうだよな、夢だよな、あんな非常識な」
きっといつのまにか寝ていたのだ。
それにしても。いくら夢だからといってあんな内容。女の子を傷つけて悲鳴を聞きたい願望とか変態性癖は持ち合わせていないはずなのだが。実は心の奥底ではそういう一面が隠れているとでも言うのか。
軽くショックを受けながらも、籐一は右手で帆乃香の体をゆすった。
「おい、帆乃香。起きろ」
いくらなんでも外で寝かせるわけにはいかないだろう。寝かしたまま背負って家に連れて行ってあげるのが筋だが、残念ながら帆乃香の家を知らない。
「んぐ」
帆乃香が目を擦りながら起き上がり、呆けた顔で籐一を見た。
「俺、帰るわ。帆乃香の家どこだよ？　送ってく」
「んー。別にいいよ。アタシも帰る」
言って、帆乃香は割としっかりとした足取りで立ち上がる。それに釣られて藤一も立ち上がった。
「明日。遊ぼうよ。今日、どこ探しても籐一いなかったんだもん」

ゲームして家で引きこもってました、とは、なんとなく情けなかったので言わない。
「ん。構わないよ」
と、遊ぶ約束を交わして、籐一は帆乃香と分かれた。
散歩の効果はなかなかに絶大であると言える。先ほど眠ってしまった名残のように、少しだけ眠気を感じるようになった。後は帰って惰眠をむさぼるだけ。
そう思っていた藤一は、家に近づいてから、その異変に気付いた。
出るときには確かに全て消えていた家の電灯が灯っているのだ。
二階の美咲の部屋の窓と、縁側から、煌々とした光が漏れている。藤一が首を傾げながら家に駆け寄ると、玄関から誠吾が出てくるのが見えた。Tシャツに七分丈のズボンという、いつも彼が夜に着ている部屋着のままだ。
「どうしたんです、叔父さん」
藤一が問うと、しかし誠吾の表情は緊張しきっており、藤一の声にも情けなくも驚いている風である。
「あ、ああ、藤一君。外にいたんですか。丁度良かった、付き合ってください」
言いながら、誠吾はバンの運転席に体を滑り込ませた。
「なにがあったんですか？」
もう一度問うた藤一に、誠吾は一つため息をついて首を振った。
「理子が、死にました。容体が急変して、こちらに連絡するまでも無くあっという間に」
藤一はその言葉に、思わず空を一度仰いだ後、運転席に駆け寄った。
「叔父さん。俺が運転しますよ。マニュアル免許持ってますんで」
「そ、そうですか？　では、お、お願いします」
誠吾も相当動揺している。こんな時に車を運転させるわけにはいかない。
理子とは一昨日話をしただけで、これまで全く関わってこなかっ

たせいだろう。それなりにショックではあったが、動揺するまでには至っていない。安全を考慮するべきだ。
誠吾が助手席に体をスライドさせ、空いた運転席に藤一が座り、エンジンをかけた。
「ねーさんは、起きてるんですか？」
言いながら、クラッチとブレーキを踏みながらシフトレバーを動かす。
藤一にとって、理子が死んだということよりも、美咲が心配だった。あの子供のような女性が、母親の死に耐えきれるとは、到底思えないのだ。
「ええ。酷いもんですよ。抜け殻みたいになってます」
藤一は、その姿を想像し、悔しげに歯を食い縛りながらハンドブレーキを下ろし、車を発進させた。

四日目（4）

亡くなった理子を後部座席に乗せ、その傍に誠吾が項垂れて座っている姿を、藤一はバックミラーでチラチラと見ながら、行く時よりも遥かに慎重な運転で村に帰りつく。

一体どこから聞きつけてきたのだろう。家に帰ると、村人が十人ほど集まっていた。殆どが老人ばかりである。

村のネットワークは恐ろしいな、と酷く冷静な思考で、村人たちの対応をしている誠吾を放置し、家に入った。

居間を見てみると、時子がやはり村人らしき老人と話をしているところだった。藤一に気付いた時子が、右の片目だけで藤一の方を見据える。

「ああ、藤一ちゃん。ありがとう」

「いえ。いくらでも、使ってください」

一礼して、階段を上がった。何よりも、美咲の事が心配だった。

藤一が自室として使っている部屋の隣の部屋のドアの前に立つ。

なんて声をかけていいのか分からない。しかし、藤一は妙な使命感を持ってして、ドアをノックした。

数秒して、人が動く気配がして、ドアが開いた。

そしてそこに、美咲が立っていた。

泣き腫らして真っ赤になった瞳は、哀れなほど彩りが無い。あの感情をストレートにぶちまける、美咲の物とは、到底思えないほど。絶望に塗れ、一周して達観し切っている顔。こんな顔をされるなら、いっそ泣きわめいてくれた方が、藤一的には良かっただろう。

逃げたい衝動に駆られた。思考が乱れる。本当に、なんて声をかけるべきか分からない。いや、声をかけようとしたこと自体間違っていたのではないか、とすら思った。

「あー、いや、その。だ、大丈夫、かなー、って」

我ながら、なんてアホなことを聞いているんだ、と嫌になってく

る。大丈夫じゃないことは明白であるのに。
美咲が、籐一のバツの悪げな表情を見ながら、無色の瞳を向け、口元に小さな笑みを浮かべた。
「大丈夫。覚悟、してたからさ」
しかし、その表情に、言葉の強さに、覚悟などというものなど微塵とも存在していなかった。
藤一は思わず、右手で美咲の左の手首を掴んだ。放っておいてはだめだ。放っておいたら、最悪、母親の後を追いかねない。そんな気がしたのだ。
「な、なんだよ、藤一？　痛いんだけど」
その突然の籐一の行動に、美咲は少しおびえた風な笑みを浮かべた。
「無理、するなよ。ねーさん。別に格好悪いことじゃないんだからさ」
覚悟していたから。大人だから。そんな、自分を騙して被っていた殻を、籐一はその一言で破った。
瞬間的に滲んだ涙を両手で何度も拭う美咲の肩を、藤一は優しく抱きしめた。
偉そうなことを言っておいてなんだが、これくらいしか、してあげられることはないのだ。

五日目（1）

外で鳴いていた夜明け前のヒグラシの声がクマゼミのそれに変わっているのを、藤一は寝不足でまるで靄がかかっている頭で気付く。

カーペットに座り込んで、何気なしに視線を送ったカーテンの隙間から垣間見える空は、相も変わらず、夏特有の鮮やかな青に染まっているのが見える。

ここは、美咲の部屋だった。昔の記憶では、美咲の部屋も藤一が今寝泊りしている部屋と同じような土壁の古めかしい部屋だったが、ここだけリフォームしたらしい。家の外見とも、部屋の主である美咲のイメージとも似つかわしくない、主に暖色でまとめられた、女性っぽい部屋である。

そんな部屋の主は、ベッドの上で疲れた寝顔を貼りつかせて眠っていた。

藤一は、時折意識を飛ばしながらも、しかし妙な使命感を持って美咲の傍にいた。しかし、いつまでもこうしているわけにはいかなかった。若輩者であるが藤一も大人であるし、美咲も大人である。近しい人物が亡くなっては、こうして子供みたいにひきこもって泣いてばかりではダメなのだ。

立ち上がって部屋を出てみると、下の階で大勢の人が動き回る気配を感じ取った。

どうやら葬式の準備が進んでいるようだ。階段を下りると、忙しく動き回っている誠吾と眼が合う。

「おお、藤一君。すみませんね、美咲の面倒を見てもらって」

「い、いえ。それよりも何か手伝うことは……」

藤一が善意で言うと、しかし誠吾は両手を振って拒絶の意思を示した。

「いやいやいや、十分助かってますよ。正直、美咲をどうするかが、一番の頭痛の種でしたから。こんなことを頼むのはなんですが、引

き続き、美咲をお願いしてもよろしいでしょうか。葬式の準備なんて、村の無駄にある団結力をもってすれば簡単なもんです」
昨夜、泣きじゃくって一時的に本当に手がつけられなくなった美咲を思い出し、藤一は肩をすくめて苦笑いを浮かべた。そう。昨夜の美咲の姿は、まさしく子供だった。覚悟なんて全然していなくて、泣いていれば母親が生き返る、とでも言わんばかりに泣きわめいていたのだ。
「そうですか。じゃあ、お言葉に甘えて、ひきこもらせてもらいましょう」
「ええ。よろしくお願いします。ああ、そうそう。兄さん……藤一君のお父さん。昼ごろに着くそうですよ」
仕事だったはずだが、流石に親戚の葬式に出させてくれないほど会社もブラックではないようで。
「うえー。あまりくつろげないですねぇそれじゃあ」
藤一はペロッと舌を出しておどけて見せた。
藤一の父親は割と厳しい。本当に誠吾と兄弟なのか疑わしいほど性格が異なる。これからやってくる父親のことを思うと、苦笑いしか浮かばない。
「やっぱり藤一君が恐れるほど糞真面目なんですね兄さんは。私みたいな不良とは大違いだ。ははっ」
そう自虐的な台詞を言い残し、誠吾はその場を去って忙しく村人の対応をし始めた。
どうしよう、と考え、とりあえず、数時間引きこもりっぱなしで膀胱が大変なことになっていることに今さらながら気づき、トイレに駆け込むのであった。

五日目（2）

「ごめん、籐一。迷惑、かけた」
かろうじて復活したであろう美咲が、ベッドの上で籐一に土下座をかます。そんな美咲の殊勝さにあわてた籐一は、両手をブンブン振った。
「いや、ぜんぜん大丈夫。ぜんぜん」
と、否定の言葉を吐いているが、いかんせん、寝不足で目の下にクマを作ってしまっている状態で言われても説得力が無いというものだ。
「ほんとに？」
美咲は、母親が亡くなったことよりも、籐一に情け無い姿を見せたことに対してしょぼくれているようである。頭を上げた美咲はしかし、昨夜ほどの絶望には塗れていない代わりに、頬を少しだけ朱に染めて俯いている。
「うん。むしろそれしかすること無かったし。さて」
バツの悪げに頭を掻いて立ち上がり、右手を美咲に差し出す。美咲は、その手をキョトンとした目を向けている。
「下、降りよう。引きこもりっぱなしってのもまずいだろ？」
「……ひ、一人で下りれる」
籐一に助けられっぱなしなのが癪なのか、美咲はワザとらしいまでに勢い良く立ち上がった。その姿を見た籐一は、肩をすくめながらドアのほうへ向かった。さすがに馬鹿にし過ぎか、と。
しかし、昨夜の美咲の姿を見てしまうと、大人扱いするのは如何なものかとも、思ってしまう。それほどに、酷かったのは確かであるが、口には勿論出さない。美咲のプライドを傷つける結果となるのは目に見えている。
幸いにも、昨日ほどの絶望感は美咲の表情には無い。もう、常時ついていなくても大丈夫だろう。

「じゃ、俺、下おりとくわ。親父と母さん来るらしいから」
みんなが準備をしているときにノラクラしているのを見られたら、大目玉食らうのは目に見えている。誠吾はああ言ったものの、肝心の美咲が立ち直ったからには、と言った感じだ。
「うん。わ、……僕も少ししたら下りる。こんな顔で人前出れない」
「ねーさんもそんなこと気にするんだなっていてえ！　ごめんごめん！」
部屋に転がっていたアダルトなゲームの業界雑誌を背中にぶつけられ、籐一はあわててその場を退散した。

五日目（3）

礼節のために、と両親が持ってきた、大学の入学式以降一度も袖を通していなかったスーツに着替える。

しかし、洗面所の鏡の前で人生二度目のネクタイに悪戦苦闘してしまう。一度目は父親に巻いて貰ったのだから、自分で巻くのはこれが初めてだったりするのだ。一度目と同じように父親に頼むのも手であろうが、なんとなく気恥ずかしい。

先ほどネットで調べた手法をしようと試みるのだが、一端が妙に長くなったり短くなったりでなかなか上手くいかない。

「何やってるんだよ。ちょっとどいてくれ」

「あ、ごめん」

呆れた風の美咲は、籐一が移動して空いたスペースに入って、手を洗う。

籐一はその横で相変わらずネクタイに苦戦しながら、チラチラと、その横顔を見た。

喪服姿の美咲の顔は、薄く化粧がなされており、それだけで、普段のガサツな雰囲気の彼女から比べると随分大人っぽく見える。その憂いを帯びた表情は、妙な色気というものも発しているように感じる。化粧ひとつでこんなにも変わるものか、と、籐一は女性の恐ろしさを垣間見ることとなった。

「なに」

その視線に気づいた美咲が、少し機嫌悪げに無粋な言葉を放った。

「い、いやー、何か雰囲気違うなーっていうか。ねーさんが化粧するとか」

「一応、ＯＬやってたからな。社会で人様の前に出るんだから、これくらい出来ないと生きてけねー」

洗った手を壁に引っかかっているタオルで拭い、籐一のほうに向き直った。

「貸してみ」
「えっ」
失敗して解いたネクタイを、美咲は半ば強奪するように籐一の手から取り、テキパキと、呆気に取られている籐一の首に巻いていく。
あっという間に、両端が丁度良い長さになるように、しかも歪み無くネクタイが装着された。
「……すげー。出来る奥さんみたいだ」
奥さんにネクタイを巻いて貰うサラリーマンという、ドラマなんかでよく見るような状態に、籐一は思わずそんなことを口走った。
「ばっ、バカヤロウ、これくらい出来て当然だっ！　高校の制服がネクタイだったからな！」
瞬間的に頬を紅潮させた美咲が、そう捨て台詞のように言い残し、逃げるように洗面所から出て行った。
なんとなく、やりにくいな、と籐一は思い、後頭部を掻いた。外見の雰囲気が変わって、中身も変わっているような気がした。
一度だけ小さくため息をついて、すっかり通夜の準備が整った居間を横断する。大量に並べられた座布団はすでに半分ほどが埋まっている。一番前の席の隅に美咲が俯いている姿が見える。
どこから持ってきたのか分からない綺麗な木製の祭壇の傍で、誠吾と籐一の父親が少し難しい顔で相談しているのが見て取れた。それを横目に見ながら、何気なしに縁側に出る。
時間的には、既にヒグラシが鳴き始めたくらいである。抜けるような青だった空も、ほんのりと夜の色を見せ始めている。
空気が、全体的にピリピリしているような気がした。そう、殺気立っている、というのが正しいだろうか。
通夜であるのだから和やかな雰囲気というのもおかしいことであるが、親類が亡くなったり、幼いころに両親絡みの通夜葬式に参加したときの感覚とは明らかに違う。村の一員が亡くなったことを悲しむ空気ではなく、何かに対する怨嗟のようなものさえ感じるような気がする。

正直言うと、この空気の中にいるのは、かなり疲れる。何もかも気にせずに全力で逃げ出してしまいたいというのが本音だった。
一度、筋肉を伸ばすように大きく伸びをし、縁側に置かれていた自分のサンダルを靴下の足に突っ込んで庭に降りた。少しでもこの空気から開放されたい。
ふ、と。門柱のほうを見ると、白い物体が目に入った。茶色い麦藁帽子に、鮮やかな白。それと対照的な、水墨のような黒い髪。
「あ、わ、悪い、帆乃香。遊ぶ約束してた、よな」
帆乃香が、門柱の影から籐一を見ていた。しかしその表情は、遊ぶ約束を反故にしてしまったことに対する怒りの色は微塵も感じられず、おびえているような風なのである。
「あ、えっと……それは、別にいいの、うん。り、理子ちゃんに、その……」
その歯切れは、いつも快活な彼女にしては珍しく悪い。怪訝な顔で、籐一は首を傾げながら籐一が近づこうとした、時。
「何しに来た！！！！」
背後で、雷鳴が響いた。そのあまりの衝撃に、籐一は振り向く暇も無く体中の筋肉が強張って動かなくなった。それほどに、その野太い声は強く厳しい。
「こ、この、疫病神が！！！！」
あんな声が出せるとは到底思えないような、一人のおじいさんが、靴もはかずに、庭に下りてきていた。その表情は激烈な怒りに染まり、あまりに力が入っているのか、額の右端に血管が浮き出てしまっている。
籐一は、そのものすごい剣幕にたじろいだ。さっきまで、居間で気難しそうな表情で別の老人と話をしており、籐一の顔も見ていない。だから、その台詞は籐一に向けられたものではない。
なので、その目線の先は、籐一の後ろにいる、帆乃香に向けられているのは歴然。
「どれだけ村の者を殺せば気が済む！」

異常、である。こんな小さな子供に向ける言葉にしては、苛烈過ぎる。老人の憤怒も、籐一には理解不能だ。しかし。
「ち、ちが、違うもん！」
「違うものか！　今日こそ息の根を止めてくれる！」
右手を、帆乃香に伸ばす老人。
刹那、フラッシュバックした。あの光景が。籐一の後ろに怯えて隠れている帆乃香と、寸分違わない少女が虐待されている光景が。悲鳴。この世のものとは思えない苦痛の顔。
その手を、帆乃香に届かせてはならない、ということを、籐一は本能的に、脊髄反射的に、一瞬で理解した。事情などは全く理解できないが、少なくとも、老人の右手は、こんな少女に対して向けていい類の手ではない。
バシッ、と、老人の右手を弾き、左手で帆乃香の胸を押して老人から引き離した。
その籐一の反応に、一瞬あっけに取られた老人が。
「よそもんが出しゃばるな！」
次の瞬間、その怒号は、籐一に向けられ、左頬に衝撃が走った。頭蓋骨全体が軋み、脳が諤々と揺さぶられ、首の骨が真っ二つに千切れそうな錯覚を与える、強烈過ぎる衝撃。
その老人の痩せた体に隠された、農作業で鍛えられた膂力から繰り出された右ストレート。
籐一は、何が起こったか理解する暇も無く、ただただ、宙を舞った自分の左の歯が一本、妙なほどスローモーションで口から放物線を描いて吐き出されるのを目で追うことしか出来ず、自分の体から力が抜けていく気持ち悪い感覚を体感する。
「と、籐一！」
帆乃香が、甲高い悲鳴で籐一を呼ぶ声が、すごく遠くから飛んできているような気がし、その声が、白く靄がかった脳内を駆け巡る。
手を、伸ばしていた。帆乃香に。来てはダメだ。逃げろ。そんな意思を示さんとするために。

激昂した老人が、見下ろしている帆乃香のさらに上から、籐一を見下ろしてきていた。
右足を振り上げる老人。土で汚れた汚い靴下に包まれた足裏が、籐一の顔面に向かう。
ストンピング。ただ、脚で踏みつけるだけの単純な攻撃である。パッと見た感じの体重はそれほど重くなさそうだが、先ほどの拳の威力からして、足腰の力も強いのは当然。それでも籐一の朦朧とした頭では、何も有用な思考が出来ず、ただただ足が踏み下ろされるのを呆然と待つことしか出来ない。
「ちょ、ちょっとちょっと！　何やってるんですか！」
縁側から、誠吾が慌てて飛び出し、寸でのところで老人を羽交い絞めにした。しかし。
「離せ！　”よそ者”が！」
「ぐっー！」
老人が大きく振り回した腕。その肘の硬い骨が、誠吾の顔面に直撃する。もがいた末のラッキーパンチではなく、明らかに狙った攻撃。
大きく仰け反る誠吾であったが、老人を離しはしない。少しだけつぶれた鼻から大量に出血させつつも、誠吾と老人の年齢差によって生まれる地力の差によって、老人は誠吾によって引きずり倒された。
「籐一！　だ、大丈夫！？」
家から出てきた美咲が、その傍でオドオドしている帆乃香に一瞥し、脳震盪で目を回している籐一を無理やり起こし、肩で支えながら、その場から逃げるように移動する。
籐一は現状ほとんど意識が無い。無意識に脚は動かしているが、籐一の体重はほぼ全て美咲にかかっている。美咲は、歯を思い切り食いしばって、ヨタヨタと心もとない足取りで歩いていく。
「ご、ごめんなさい、ごめんなさい……わ、私が……来たせいで……」

玄関口の方に回りこんでいく美咲に向かって、帆乃香は涙を浮かべながら謝罪している。しかし、美咲はそんな謝罪を鼻で笑った。
「ほの姉は悪くないよ。いつもの糞爺の癇癪でしょ。流石に流血沙汰になってたのはビックリしたけど」
玄関に入り、廊下に籐一を寝かせる。それに続いて玄関に入った帆乃香が、藤一の横に座り、焦燥感たっぷりの表情で藤一をのぞきこむ。
「おい、藤一！　藤一！」
そして、半分白目を剥いて気絶しているその顔を覗き込みながら、右手で頬を軽く叩いていると、すぐに藤一は意識を取り戻す。
身を起こそうとして、しかしその自分の体が異常に重く、すぐにへたり込んだ。殴られたところが腫れ上がって、心臓の流れに同調した鈍痛が藤一を襲う。
「じっとしてろ。冷やすもの持ってくる」
言って、美咲は台所のほうへと引っ込んでいく。
残された帆乃香は、朦朧としている藤一に必死に謝罪を繰り返している。
「いや、その……まあ、うん、事情は全く分からないんだけどさ」
帆乃香が悪いとは藤一には思えない。しかし、あの老人が悪いと言っても、異常な激昂具合も理解不能。
「よかったら、何があったのか聞かせてくれない？」
そう言って、帆乃香を促すように笑った。そして、崩した正座の膝の上で、強く握り締められて真っ白になっている帆乃香の小さな手に、自分の右手を添える。
帆乃香は、そんな藤一の手に視線を向けながら、迷うように視線を泳がせた。やはりあまり言いたくはないらしい。間々あって、沈黙に耐えられずに、やっぱり言わなくていい、と告げようとした時、帆乃香のちまっとした口が開く。
「私がね、九十年くらい前に村の人の半分以上を殺したことになってるの」

「はぁ！？」
その奇想天外すぎる台詞に、藤一は思わず大声をあげた。びくり、と帆乃香の肩が竦められる。しかし、震える声で続ける。
「ごめん。ごめんね。わけわかんないよね。でも、事実なの」
そう言って、帆乃香はポツポツと昔話を語り始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2400u/

短夜の夢

2011年9月24日03時17分発行